

## 詩篇

この書にはイスラエルのあらゆる時代から集められた  
ヘブル語の詩歌祈りが 150 篇収められています  
ダビデの詩篇は 73 篇あります彼は詩人であり豎琴奏者として  
知られていました他にはアサフコラ人神殿で賛美  
の奉仕をする人たちが書いたものもありソロモンとモーセの詩も  
ありますそしておよそ三分の一は作者不明  
です

多くの詩は神殿の賛美奉仕者が歌うために用いられていました  
が詩篇はただの賛美歌集ではありません

これらの古代の詩はバビロン捕囚後の時代に集められ

今ある形に構成されましたこの書には最初から最後まで読  
まなければ気づかない構造とメッセージがあります

これを理解するには最後のセクションから見るのがよいでしょう

詩篇はイスラエルの神を讃える 5 つの詩で終わります

これらはハレルヤという言葉で始まりまた終わっています

これは神の名ヤハウエの省略形であるヤアを讃えよ

という意味のヘブル語です最後のセクションははっきりした

構成で締めくくられていますさて詩篇には意図的な構成が他

にもあるでしょうか聖書を開いてみると第一巻第二

巻第三巻第四巻第五巻と随所に記され 5 つの大きな

セクションに分けられています各セクションの最後はほむべき

かなイスラエルの神主とこしえからとこしえまでアーメン

アーメンというような似た文章で終わっています

詩篇の最後のまとめそして中心部分となる 5 つのセクションの構成

を見たところで次にはじめの部分の 1 篇と 2 篇を見ましょう

第一巻の詩のほとんどはダビデの詩ですが 1 篇と 2 篇は作者が記  
されていないため第一巻に含まれない冒頭部分と見なされます

1 篇はトーラーを思い巡らし昼夜それを口ずさみ従い歩む人は幸い  
だと説明していますこのトーラーという言葉は教え

を意味していますが具体的には旧約聖書の最初にあるモーセ五  
書のことを示していますここでは両方の意味で用いている

ようですまた詩篇が 5 つのセクションに分

かれている理由も分かります詩篇は神の民が祈りを通してトー

ラーにある神の戒めに生涯従うことを教える新たなトーラーなの

です 2 篇は第二サムエル 7 章に記されている

ダビデへの約束を振り返りいつかメシアが世界を治める神  
の国を立て悪と反逆者を打ち砕くと表現しています  
この詩の最後は1篇の始まりと同じ表現でメシアなる王に身を避ける  
人は幸いだと記していますこの冒頭の2つの詩を通して  
詩篇とはトーラーの戒めを忠実に守ろうとしメシアの王国を待ち  
望む神の民の祈りの書であることが分かります  
さてこの2つのテーマが紹介されたところで  
中心部のセクションがこれらについて詳しく語ります  
第一巻の真ん中の15篇から24篇の始まりと終わりが  
神の契約に忠実であるように呼びかけています  
そして16篇から18篇ではダビデがその忠実な者の模範として  
描かれています彼は神に助けを求め神は彼を王  
とします  
20篇から23篇ではダビデのこの姿が  
未来のメシアなる王の象徴となっています  
メシアも神に助けを求め救い出され世界の国々を治める王国を  
与えられるからですそしてこの詩集の真ん中は  
トーラーを与えた神に賛美を捧げる19篇です  
つまり1篇と2篇の2つのテーマがここでつながっているのです  
第二巻はエルサレム神殿への帰還を望む2つの詩で始まっています  
この希望はメシアの王国への待望と重なります  
そして第二巻はメシアなる王が国々を支配する  
未来を描いて閉じられますこの詩はメシアの王国に関する  
預言書のことばを連想させます神がアブラハムを通して全世界を  
祝福するといった古代の約束がこの王の支配を通して実現する  
からです第三巻もまたダビデへの神の約束  
で終わりますがここではバビロン捕囚の視点から  
描かれていますこの詩は神はダビデの家系を見捨ないという  
約束を思い返す一方でイスラエルの反逆と捕囚またダビデ  
の家系の失墜を語りますそしてダビデへの約束を忘れないで  
くださいという祈りで終わります  
第四巻はこの捕囚という悲劇に応答し90篇へんでは先祖モーセ  
の祈りを思い起こしますモーセが金の子牛事件のあとシナイ山  
で祈ったようにここでも神のあわれみを祈り求めるのです  
第四巻の真ん中の詩集ではイスラエルの神が世界の真の王  
であると宣言しています創造されたものすべてが神の国

と義の到来を歓迎します第五巻は神が民の嘆きを聞きいつ  
の日か悪を打ち破り神の国をもたらす  
王を送ると語る詩集で始まります第五巻は更にハレル詩篇と都のぼり  
の歌と呼ばれる2つの大きな詩集を含んでいます  
いずれも最後の詩でメシアの王国について語り  
神が出エジプトのように再び神の民を贖い出す希望を語ります  
そしてこの二つの詩集に挟まれるように119篇があり  
これは詩篇の中で最も長い詩ですこの詩では  
8行ずつがそれぞれ同じヘブル語のアルファベットで始まっていて  
神の言葉であるトーラーを神の民への贈り物として称えています  
こうして1篇と2篇で紹介されたテーマトーラーとメシアが第五  
巻で結び合わされるのですそして最後の5つの詩へと辿り着  
きます中心の詩である148篇はイスラエル  
の神を讃えるようすべての被造物に命じています  
主は御民の角を上げられたからです  
角というのは勝利を表す牛の角のたとえで  
第一サムエル2章のハンナの祈りまた詩篇132篇でも使われています  
ここでは角は悪に勝利する未来のメシアを表しています  
この様にメシアのテーマにもう一度触れ詩篇は終わります  
さて詩篇を順番通り読まなければ見逃してしまうことが他にあります  
詩篇には様々な種類の詩がありますが大きく分けると嘆きの詩と賛美  
の詩の2種類です嘆きの詩はこの世界や詩人自身  
に起こっている悲惨な出来事に対する痛み戸惑い怒りを表現しています  
これらの詩はこの世の問題に注目し神の介入を求めます  
詩篇には嘆きの詩がたくさんありこの世の悪を嘆くことは適切な  
反応だと教えています嘆きの詩は詩篇の第一巻から第三巻  
を通して多く見られますが時折賛美の詩もあります  
賛美の詩は喜びと祝祭の詩であり世界の良いものに目を留め  
神がなされたことを思い起こし感謝を捧げます  
第四巻と第五巻では嘆きの詩より賛美の詩が多くなり  
最後の5つのハレルヤの詩に至りますこの嘆きから賛美への移り変わり  
は祈りの本質について教えてくれています  
メシアの王国を待ち望みつつこの世界また人生に起こる悲劇  
を見つめる時そこには葛藤も生まれるものです  
詩篇は人生で起こる苦しみを見て見ぬふりをしないよう教えます  
が一方で信仰というのは未来志向

## でありメシアの王国の約束に目を向けるものです トーラーとメシア嘆きと賛美信仰と希望これが詩篇です

### 500 字要約

詩篇は、古代イスラエルのヘブル語の詩歌祈りが 150 篇収められた書物で、ダビデの詩が 73 篇含まれています。他にもアサフコラ人や神殿の賛美奉仕者、ソロモン、モーセなどの詩もあり、約三分の一は作者不明です。これらの詩は神殿で賛美奉仕者が使用するために作成されたものであるが、単なる賛美歌集ではなく、特定の構造とメッセージがあり、最後のセクションからの視点が役立ちます。

詩篇は 5 つのセクションに分かれ、最後のセクションではイスラエルの神を讃える詩で終わり、ヤハウエの省略形であるヤアを讃えるヘブル語「ハレルヤ」で始まり終わります。

詩篇の構成には意図があり、聖書の五巻と類似した構造が見られます。各セクションの最後は、イスラエルの神主と神の国の到来を宣言する似た文章で終わります。中心部には 5 つのセクションがあり、それぞれ特定のテーマが探求されています。

1 篇と 2 篇はトーラー（モーセ五書）とメシアのテーマを紹介し、中心部のセクションでこれらのテーマが掘り下げられます。各セクションは異なる視点からトーラーの戒めへの忠実さとメシアの到来を強調しており、中心部ではダビデを忠実な者の模範として描写します。詩篇は嘆きの詩と賛美の詩の 2 つの主要な種類の詩で構成されており、嘆きの詩ではこの世界の問題や個人的な苦難に対処し、神の介入を求める反応を表現します。賛美の詩は神の業績や喜びに焦点を当て、感謝の意を表します。詩篇は嘆きから賛美への移行を通じて、信仰と希望を伝えます。

これらの要素が詩篇の構造とテーマに組み込まれ、詩篇がイスラエルの神への賛美と信仰の表現であることを強調しています